

① 離れていても響く声

② 古川桃流

③ あらすじ（2000字程度）

スマホがブブブと震える。午後十時半のアラームだ。目の前にいるお客さんは、注文する気配がない。バーカウンターから出るなら今だろう。

八人が座れるカウンターの左端から出る。客席側の床にはざらっとした滑り止めのペンを塗ってあり、靴の底から伝わる感触が変わる。

木製のドアにはガラス窓がついているけれど、店内が明るいので、外はよく見えない。そっと開けると、カーンコロンとドアベルが静かに響く。涼しいと暖かいの間くらいの空気があたる。もう四月になった。

このアパートメント鉤括弧は、二つの棟が文字どおり『』の形で建っている。ここは、『の左下角の一階になる。

ドアノブに引っ掛けてある「OPEN」のサインを、裏返して「CLOSED」にした。窓には、すりガラス風の加工で、カフェバーの店名「STONE」のロゴをあしらっている。

店を引き継いだとき、私の姓である石谷からとった。すぐに変えるつもりだったのだけれど、結局、十年以上この店名でやってきてしまった。

ガラス窓越しに中が見える。壁はクリーム色、家具はナチュラルウッド調で、無印良品の店のようだ。このくらいが、気負わなくていい。格好つけすぎても、雑然としすぎても疲れる。

店内に戻ると、この数年、全力で稼働している換気扇の音が聞こえる。不快ではないけれど、もう少し静かなほうがいい。

カウンターの八席のうち、三席が埋まっている。ドア側のカップルは、いつも二、三杯ほどをきれいに飲む。奥側のひとりは、私と同じく四十代男性の大野さんだ。仕事帰りにカジュアルなジャケットで訪れて、ゆっくり飲んで喋っていく常連客だ。夫婦で来ることもあるし、今夜のようにひとりで来ることもある。

大野さんとカップルは顔見知りだけど、席が離れているので、話してはいない。さっきまでカウンターは満席で、隅の立ち飲みテーブルにも客がいた。

「石谷さん、アルバイトさん？」

大野さんがカウンターの奥を見ながら、話しかけてくる。

「ええ。娘にね、手伝ってもらってるんです。肘をケガしまして」

「ケガって仕事中に？」

「いえ、仕事前に中庭でね」

「TODO 橘さん確認 っから ↑ ↑ ↑」

先々週の日曜日、中庭の桜のあたりに、人がしゃがみこんでいた。近づいてみると、このアパートに住んでいる常連客だった。

ひとりは中年の男性で、いつもケストリッツァーというドイツの黒ビールを飲む。もうひとりは、最近一緒に来るようになった早瀬さんという青年だ。ふたりとも二階のWeb制作会社に勤めていて、家賃補助だから、三階、四階に住んでいるらしい。

中庭に埋まっているタイムカプセルを探している、と言っていた。一緒にどうですかと誘われて、そうですね、とあいまいな返事をした気がする。店は準備できているし、お客さんからの誘いだから、ちよっとだけ手伝おうか。軽い気持ちで、近づいて挨拶をした。

小さな庭だからすぐに見つかると思っていたのに、スコップ片手に掘り進めても、土がひっくり返るだけで、何も出てこない。このあたりだと目星がついているだけに、もどかしく、かえって使命感のようなものが湧いてくる。

問題を解決できそうなきほど、関与したくなるものだ。普段は遠くに住んでいる娘のことは気にならないのに、長い休みでこっちに来て目の前にいると、アドバイスや小言を言いたくなる。

開店時間が近づき、挨拶をして店に戻ることにした。ぼんやりと娘のことや、関与のことを考えていたような気がする。そのとき、木の根かブロックにつまづき、手をついて倒れてしまった。

「へー、そんなことがあったんだ。大丈夫？」

大野さんが驚く。

「今はね。でも、そのときは、ほんとに痛くてね。肘を動かせませんでした」

早瀬さんという青年は、店を手伝うと言ってくれたが、そうもいかない。難しいことはやってないけど、初めての人には店を回せないだろう。そもそも私が転んだだけなのだ。ただ、その日はビール樽の配達があったので、店の冷蔵庫まで運んでもらうのだけは手伝ってもらった。

【TODO 橘さん確認 ここまで → → →】

臨時休業にして医者に診てもらおうと、脱臼していると診断され、安静にするように言われた。

「そうしたら娘が手伝ってくれると言うので」

「さすが石谷さんの娘さん、いきなりお店に出られるんだ」

「最初はドリンクだけで、時短営業でした」

【TODO 大場さん確認 ここから → → →】

娘の弥生は、先月から春休みで、こちらに来ている。ときどき皿洗い、掃除、ちよっとした片付けを手伝ってもらっていた。接客はしない。お客さんに話しかけられると緊張して、焦るらしく、いつも下を向いて仕事をしていた。一度だけ、高校生くらいの女の子のお客さんと話しているのを、見かけたことがあるくらいだ。

【TODO 大場さん確認 ここまで → → →】

接客の経験がなければ仕方がない。私だって、キャバクラのボーイで食いつないでいたときは、客にも店長にも愛想が悪いと叱られたものだ。愛想というのは気持ちではなく、技能だ。

肘が治るまで安静にしなければならないと話したら、弥生は店を手伝おうかと言ってくれた。それならちゃんとアルバイトとして雇おうという話になった。

最初は数時間だけの時短営業から始めた。弥生には飲み物をついだり、作ったりする仕事をやってもらい、私が接客をした。

少しずつメニューを増やして営業時間を長くして、二週間ほど経った。肘はもう大丈夫だが、アルバイトは続けてもらっている。ただ小遣いを渡すより、アルバイトという建前があるほうが、はじめがつく。

【TODO 大場さん確認 ここから → → →】

「娘さんが作ってくれたホットドッグおいしいよ」

「パンがおいしんですよ。A棟の、みなとやさん」

【TODO 大場さん確認 ここまで → → →】

私はシンクにたまった皿やグラスを洗いながら、弥生に水を出すように言った。大野さんは酒が進むと、水を飲むのを忘れる。

弥生が水の入ったグラスを出すと、大野さんが話はじめた。

「ありがとう。この仕事はもう慣れた？」

「えっ、あ……はい」

「どうもはじめまして。大野ついでいいです。仕事帰りに来ることが多いんだけど、最近、忙しくってね。二週間くらいあいたかな。ひとりで来ることもあるし、妻と来ることもある」

「あ、はい」

「今日は、妻が出張でいなくてね」

「ああ、はあ」

「前に、この店でビデオ通話をしたことがあるんだけどね。照明が逆光になるから顔が暗く映っちゃうんだよね。あと声もうるさくなっちゃうし。それで小声で話したら、妻には、周りの音が入るから声がよく聞こえないって言われるし――」

「アプリは何を使ってるんですか？」

弥生が話をささげる。大野さんは酔いが回っていて、いつにもまして寛容だ。いらついている様子はない。

「えーっとねえ、この緑のやつ」

「それだったらハードウェアでホワイトバランス調整するウェブカムがいいです。USBのType Cなら帯域は十分です。それから、単指向性のマイクをつけたいと思います。店の換気扇が強くて、風の音が入るかも知れないので、ウィンドスクリーンをつけると聞きやすくなります。持ち運びをするのなら――。あつ、すみません。つい」

「詳しいんだねえ。よく分からないんだけど機材なの？　そういうの持ってるの？」

「はい。きちんと録画するときは、デジタル一眼とスタジオマイクを使って取り込んで、後でデスクトップで編集して、エンコードかけてます。外でライブ配信するときは、帯域が大きすぎると上り回線がきつくなるので、ウェブカムで撮りながら、データが小さくなるエンコーディングを使います。それから――、あ、また、すみません」

「そういうの好きなんだね」

家で弥生が、配信がどうか言ってたのは、このことだったのか。よく分からないので、聞き流していた。

大野さんが楽しそうに笑いながら、話を続ける。

「今もそういう機材もってるんだったら、ちよつと見せて」

「ちよつと待っててください」

弥生がカウンターの奥に戻って、自分のバッグからタブレット、カメラ、ヘッドセット、マイクを取り出す。

「仕事が始まるまで時間があるときに、ここで配信してるんです」

弥生はヘッドセットにアルコールスプレーを吹きかけて、拭き取ってから手渡す。大野さんがそれを頭につける。弥生はカメラの位置や方向を調整し、タブレットで何かアプリを立ち上げたようだ。

「このカメラで撮ると、顔が明るく映るんです。こちらのマイクに話してみてください。あ、もつと小声でも大丈夫。はい、そのくらいでオッケーです」

私が、カウンターの端にいるカップルにうるさくないかと尋ねる。カップルは、弥生たちをちらつと見て、大丈夫ですよと微笑んだ。

「では通話を始めますよ。どうぞ」

大野さんはタブレットの画面を見ながら、明るい声で話し始める。

「石谷さんの店からつないでるんだ、娘さんがセットアップしてくれた。おつかれ、何飲んでるの？　僕はビールだよ、ニューイングランドスタイルのビールで――。うん、うん。ときどき見かけるお客さんもいるよ。うん、え？　話すの？　ほんとに？」

大野さんの視線に気づいたカップルが、どうしましたと尋ねる。

「すみません。いま、妻とビデオ通話でつながっているんですけど、話したいと言ってます」

弥生は、タブレットを操作してスピーカーから音が出るようにしたらしい。一瞬、キーンとハウリングが鳴る。慌ててなにか調整をして、音がおさまった。

「はい、これで大丈夫です」

大野さんとカップルが、タブレットの向こうの大野さんの奥さんと話し始めた。こんばんは、今日はどちらにいますか、何飲んでるんですか、こっちは春らしい天気ですよ、こちらはまだ寒いんですよ。

他愛のない話が続きあいだ、大野さんはカップルにお酒を一杯ずつおごり、カンパイと言つて、ぐびつと飲み、楽しそうにビデオ会議を続けた。私はグラスに水を注ぐ。

大野さんがじゃあまたと言つて、通話を終えたとき、カップルはすでに帰っていた。

「楽しかった、ありがとう。弥生ちゃんだっけ？　一杯おごるよ」

「あつ、いえ」

「遠慮しなくていいんだよ。石谷さんも、よくやってるよ」

「その、お酒はあんまり……」

「そうなんだ。ごめんごめん。無理に飲まなくていいよ。じゃあ、石谷さんどうぞ」

私は、自分用にビールを一杯注ぎ、いただきますと言つてから口をつける。

「ほんと、弥生ちゃんにおごりたいんだよ。ちゃんとバイト代あげてね」

サービスマンとして、メニューに入れておきましょうか、と冗談を言ってみる。すると、大野さんは真顔になった。面白くなかったかな、と不安になる。

「それが、いい」

と、大野さんは力強く言った。

「それがいいよ。うん、いいじゃん。またやりたいから、メニューに入れたいよ。弥生ちゃんもそう思うでしょ。できるでしょ？」

「今日みたいに複数人でやるなら、各自がビンマイクをつけて、ミキサーに接続したほうがいいですね。会議室用のマイクだと、お皿を洗う音や、遠くの雑談も拾っちゃうので——」
弥生は機材のことを延々と話し続けた。大野さんは、ほとんど分かっているだろう。話題を変えたほうがいい。私は、奥さんと仲がいいですね、と割り込んだ。

大野さんがはにかんだような表情をして、頭をかく。

「それもあるけどね。でも、それだけじゃなくなってるね。遠くに引越してしまったお客さんとか、都台でお店に来れない人と話せるといいでしょ。この建物も、もうすぐ取り壊しだし。お店が引越したら、足が遠のくかも知れない。それがビデオ通話でつながるならいいじゃん。お金を払ってでもやりたいよ、ほんとに」

私は考えておきましょう、とあいまいに答えておいた。

閉店後、トイレを掃除してから戻ると、弥生がカウンターを水拭きしている。

「お父さん、この建物の取り壊しって、いつだっけ」

「今年中だったかな。退去期限はもっと早くて、あと四ヶ月」

「次のお店見つかったの？」

「そのうち見つかるよ。補填費用も出るから、急がなくていい」

このアパートメント鉤括弧は、古い建物で、ずいぶん前から取り壊しの噂はあった。一ヶ月前の三月、正式に日程が決まったのだ。急なので退去費用だけでなく、事業の補填費用も出るから、一年くらいは仕事をしなくてもやっていける。

「近くには空いてる物件がないって言ってたよね。どこに引越すの？」

「似たような町で探してる」

「今のお客さんはどうするの？」

こうやって細かく突っ込むところは、母親似だ。

十年前に離婚したとき、妻が一人娘の弥生を引き取った。私はリストラされた後で、キャバクラのボーイで食いつないでいて、収入も生活も不安定だった。

地方都市の実家近くで新しい職を見つけた妻は、離婚届を持ち出した。弥生は思春期だったし、キャバクラで働く父親よりも、計画的に看護師の仕事継続している母親のほうが、頼りになったはずだ。それ以来、弥生のことは妻、というか、その元妻に任せっぱなしだ。年に一度か二度、弥生はうちに泊まっていく。不便はありそうだったが、不幸そうではな

った。

大学卒業する歳になり、最後の春休みということで、今はうちに来ている。

私は補填費用を就職祝いとして渡せば、親としての役割が終わると考えていた。これからは気楽にひとりで行っていきけると思っていたのだ。

ところが近所に空いている物件がなく、別の町で店を開いて、一から商売を始めることになる。客がつくまでは補填費用に手をつけることになるだろう。補填費用をほんとに弥生に渡せない。だいたい、弥生は卒業後のことを、どう考えているかも分からない。やりたいことがあるのか、要領よくやっていきたいのか、何かチャレンジをして挫折をしたのか、あるいは、困っていることがあるのか。

「弥生こそ、就職活動は進んでるの？」

「うん、まあ」

「お母さんはなんて言ってる？」

「ああ、うん」

こういふ、あいまいな返事をするところは、私に似ている。まじめな元妻は氣をもんだらう。

「タブレットとかカメラで何やってんの？ 変なことしてない？」

「大丈夫、バーチャル動画配信だよ。アバターをかぶせるの。エロコンテンツじゃないよ」

「チャンネル登録とか多いのか？」

「うーん、まだまだだねえ」

そりゃあそうだろう。何万人も登録者がいたら、それで稼げると聞いたことがある。

「ITに詳しいんだったら、そっち方面でバイトでもやってみたら？」

弥生はうなづくが、返事をしない。布巾を握り、こちらに背を向けて離れていく。

突っ込んでいいのだろうか。それとも黙っているほうがいいのか。あるいは、きちんと返事をしろと叱ったほうがいいのか。弥生は態度が悪いわけでもないし、悪い遊びをしている様子もない。けれど、ちよつとしたことで、黙ってしまった。そこから、どうやって話をつなぐのでもいいかも分からない。

「なあ弥生、聞こえてる？」

弥生が振り向く。

「聞こえてるよ。ねえ、だったら、オンラインとオフラインのハイブリッドパーティーしようよ」

「ハイブリッド何だって？」

「大野さんが言ってたでしょ。お店に来られない人や、遠くに引越した人と、このお店でビデオ通話したいって」

引越した人が、いまだら、ここの常連や私とビデオ通話をしたいと思うだろうか。積極的に連絡先を尋ねたこともないので、気が引ける。SNSを検索すれば見つかるだろうけれど、

「この店はあんまり賑やかじゃないからなあ、他のお客さんの迷惑になるのがなあ」

「今日のお客さんは、うるさくないって言ってたよ。ITの仕事したらいいんでしょ」

「それ仕事じゃないだろ」

「大野さん、お金を払ってもいいからやりたい、って」

確かに言っていたが、商売として成立するだろうか。ビデオ会議は自宅で無料でできる。わざわざ私の顔を見るのに、金を払わせるのか。遠隔のお客さんにドリンクやフードを提供できるわけでもない。

「お父さん、考えとくって言ってたよね。大野さん、返事を待ってるよ。そのままフェードアウトするの？ お父さん、困ると返事を先延ばしするよね」

「それは……」

弥生だって同じだろう、と言いかけて、やめた。残念ながら、私に似たのだ。

有料にするかどうかは別にして、やってみようか。最悪のシナリオでも、大野さんと弥生だけが盛り上がりつつ終わり、というところだろう。今夜やってみたことを、もう一度やるだけだ。

「機材には、金を出せないぞ」

「大丈夫だよ。お店と家にあるタブレットとかでできるよ。マイクとミキサーを買い足すかも」

「それくらいならいいよ。じゃあ、それで進めてもらおうかな」

「やったー」

ゴールデンウィーク初日、四月二十九日にハイブリッドパーティーをするのが、よい選択だったのか未だに自信がない。もしトラブルがあつて解決に奔走したら、残りの連休を心身ともに疲れたままで営業しなければならぬ。一方で、疲れ切っているゴールデンウィーク後半に、慣れないパーティーをするのも不安だ。

けれど、決めてしまったんだから仕方ない。連休初日の今日、ハイブリッドパーティーをするのだ。時計を見ると午前十時。開店まで五時間しかない。慣れないことをするとき、早

めに準備を始める。時間が余れば、座ってうたた寝でもしてればいい。

カウンターの中の足元にある空箱なんかを、裏の収納に移動させる。ついでにカウンターの上の小物もどけて、スペースを作る。今日は弥生も私もばたばたするだろうし、配線関係で予想外のことが起こるかも知れない。

それにしても、あつという間の三週間だった。

ハイブリッドパーティーを開くことが決まったとき、私は、複数のマイクやスピーカーを使う場合の構成を考えてみた。信号処理が必要かも知れないと考え、押入れから電子部品や機材を引っ張り出してきて、ほこりをはらって、つないでみたりました。

ところが、いざ弥生を助けてやろうと話しかけても、話が噛み合わない。ほとんどの信号処理はタブレットやパソコンのソフトウェアでやってしまうらしい。映像の明るさも、カメラやパソコン側で調整できるので、店の照明もそのままいいと言う。

それでも私は、理論的には動くかも知れないけど、念のため確認したほうがいいよ、と助言した。弥生はため息をついて、もう試したと言う。実際に動いているところを見せられ、私は黙るしかなかった。エレクトロニクスの仕事を離れて、私が酒を出していた十年の間に、ソフトウェアが恐ろしく進歩してしまったのか、それとも、弥生が飛び抜けて優秀なのか。私はそれさえも判断できなかった。

念のために店でも確認したらいいんじゃないかな。音のはね返りとかも違うだろうし。

私の助言を、弥生は拒絶した。大丈夫だよ。配信アプリのこと、ぜんぜん分かってないよね。それにIT一般のことも。チケットだって、最初はお店で現金でとか言ってたじゃん。遠くにいる人とつながるパーティーなのに、遠くの人が支払えないよ。四階に住んでる早瀬さんだっけ？ あの人にアドバイスをもらったから、オンラインのチケット販売サービス使えたんだよ。回路のこととか詳しいのかも知れないけど、そういうの、今はいらないから。

それ以来、配信に関しては話さなくなってしまった。どうなってるかと聞いても、大丈夫としか返事がない。私は、最新技術を知りたいみたいなのを言って、何度かアプリが動く様子を確認したくらいだ。

裏口から弥生が入ってきた。十時より少し遅れている。さつき空けておいたスペースに機材をどんと置いて、口もきかずに準備を始めた。

私はメニューが書かれた黒板を、壁から下ろす。チョークを滑らせると、カッカカッと静かな音が店に響く。今日はばたばたするだろう。きりのいい料金に変更しておけば、お釣りの受け渡しが減る。私は、黒板のメニューを書き直していく。

ハウリングの耳障りな音が、キーーンと店内に響きわたった。

弥生の手元を見ると、タブレットと音響機材を二セット、カウンターのの上に置いてある。あわてて音量をゼロにしたらしく、ハウリングがおさまった。

マイクで拾った音を、一台目のタブレットのアプリが配信する。二台目のタブレットのアプリが受け取った音は、スピーカーから出ていく。その音は、すぐ近くにおいてある一台目のタブレットのマイクに拾われる。その音が配信されて、二台目のタブレットに……といったのが連鎖すると、耳障りなキーーンというハウリングが起こる。

「家では何度もテストしたし、店でも一度テストしたのに」

でも、バーティ本番での配置で、ポリウムを大きくしたのは初めてだ。硬い壁にあたった音は、少しだけ時間がずれてマイクが拾う。そういう環境ではハウリングが起こりやすい。弥生は、ひとしきり、知り合いにチャットで尋ねたり、ネットを検索したりした後、画面を見つめたまま、動かなくなってしまった。

「どうした」

「ハウリングが取れない」

「アプリじゃ対応できないの？」

「だめみたい」

「値段の高いアプリでも？」

弥生はうつむいたまま、首を横にふる。チャットの履歴を覗くと、すでにそんな話は終わっているようだ。民生品では対応できず、専用機材は高価すぎる。量販店の棚に並んでいるわけではない。そういうチャット履歴が残っている。

「ごめんなさい。どうしよう」

涙が浮かんでいる。

「まだ時間あるから。最悪、解決しなかったとしても、ヘッドホンを使えばハウリングは起こらないんだよね？」

「うん。でもそれだと、みんなでおしゃべりって感じにならないよ」

「分かっている。それが最悪のシナリオだ。金を渡すから、マイク付きのヘッドホンを買ってきてくれ。エコーキャンセルがついているやつ」

「でもバーティじゃなくなる。ごめんなさい」

「分かっている。それが、最悪の、シナリオだ。保険だ。これからマシなシナリオにするんだ」
私は、一旦自宅に帰る。先日、押し入れから発掘した「DSP評価キット」と書かれた箱

10

と、自分のパソコンをエコバッグに入れる。ああ、それから電子工作用のはんだごてや配線部品の入った箱も必要だ。いびつな形でパンパンに膨れたエコバッグを持って、店に戻った。パソコンを起動して、開発ツールをダウンロードして、インストールする。待っている間に、DSP評価キットの箱から回路基板を取り出し、マイクとスピーカーをつなげる。

開発ツールのインストールが終わっている。私は簡単なサンプルプログラムを見つけて、マイクから音を取り込んで波形を見たり、スピーカーからドレミファソラシドと音を出したりした。

「ただいま。ヘッドホン買ってきたよ」

弥生が戻ってきた。まずは、最悪シナリオの確認だ。弥生と私はエコーキャンセルのついたヘッドホンを装着して、タブレットのアプリを起動して、ビデオ通話をする。互いの声が、ちよつと反響することがあるが、会話をするには問題ない。

「じゃあやるぞ、手伝ってくれ」

「このDSP評価キットってなに？」

「DSPはデジタル・シグナル・プロセッサ。信号処理専用の半導体だ。テレビとか音響機器の中に組込まれている。けど、製品化する前に、プログラムをしてテストする必要がある。そのために、半導体と周辺回路を一緒にした基板がある。それが評価キットだ」

「この半導体にプログラムをするの？」

「そうだ」

「できるの？」

「昔やってた。今はどうかな。とりあえずやってみる。つないでくれる？」

弥生は配線を変えた。さつきまでは、タブレットにマイクとスピーカーが直接つながっていた。それを外して、タブレットに評価キットをつなげ、評価キットにマイクとスピーカーをつなげる。

私はエコーキャンセルのプログラムを書く。基本的には、スピーカーから出た音を、近くのマイクが拾うのを除去すればいい。けれど、今夜のバーティでは、もう一台のタブレットのスピーカーや、それを使っている人の声も除去する必要があるぶん、複雑だ。

サンプルプログラムを改造していくと、なんとか形になった。評価キットに転送する。ふたたび通話してみると、ハウリングは起こらない。

「え、もう完成したの？」

「いや、まだだ」

11

私がマイクとスピーカーの向きを変えるて、あーあーと声を出していると、キーンとハウリングが鳴り響く。

「大丈夫。パラメーターの調整でいける」

スピーカーから出た音は、何ミリ秒か遅れてマイクに入ってくる。それは隣のタブレットとの距離とか、ネット回線の遅延に依る。何度か調整しているうちに、適切なパラメータが見つかった。

「すごい！　こんなこと、できたんだ！　なんで黙ってたの？」

「やる機会がなかった」

電子工作の機材や、パソコンを片付けていく。DSP評価キットがむきだしだけれど、仕方ない。濡れると壊れるので、ジップブロックの中に入れておいた。

「ねえ、お父さん」

弥生がうつむきながら、目を合わせずに、隣に立つ。

「あの、ええと。偉そうにしてごめん」

「うん、ああ」

「怒ってたでしょ」

「いや、まあ。へこんでたって感じかな」

「本当にごめん」

「こっちも、ちゃんと話をすればよかった。慣れてないのがよくないな」

カウンターを水拭きする。

「パソコンは片付けないの？」

「後で調整できるように、置いておこう。お客さんが入ると、反響のしかたが変わるから」

「TODO 橘さん確認 〆〆から 〆〆〆」

カラコンと振り子ベルが鳴って、表のドアが開く。四階の早瀬さんが顔をのぞかせた。もしかして準備中でしたか、出直します、と出ていこうとする。

時計を見ると、午後三時だ。弥生が、早瀬さんを引き止める。

「どうぞ、どうぞ。ただいま開店です」

「TODO 橘さん確認 〆〆まで 〆〆〆」

メニューも減らして、価格もシンプルにしたけれど、それでもバタバタした。弥生がいなかったら、さばき切れなかっただろう。

このアパートに住んでいるお客さんや、大野さん夫妻のような常連客が、入れ替わりやつて来た。

速くに引越してしまったお客さんや、介護なんかで家を空けられないお客さんは、ビデオ会議で参加した。私は事前にお酒をみつろって送っておいだ。せっかくなのでスーバーでは売っていないようなビールや、ノンアルコールカクテルを、飲食店向けの酒屋さんから仕入れたのだ。緊急事態宣言中、一時的に飲食店であっても、免許無しでテイクアウト用に酒を販売できた時期があった。今後にも必要になるだろうと思って、免許を取得しておいでよかった。

忙しかったのは、ビデオ会議でも接客が必要だったからだ。食べ物を出したりしないから、かえって難しかった。会話だけで楽しませないといけないのだ。

大野さんは、最初はおとなしかったけど、酒が入るとだんだん元気になってきた。座っていた席にいないなと思ったら、不慣れなお客さんの隣に立って、アプリの使い方を教えていた。そのたびに私は、マスクをしてくださいね、と言わなければならなかった。

十一時半になって、最後のお客さん——つまり、大野さんだ——が帰っていった。

弥生がタブレットやDSPキットを片付けている。

「疲れたねえ」

「疲れたなあ。弥生がやってるバーチャル配信とかも、こんなに疲れるの？」

「まさか。ネタがないから、すぐに終わっちゃうよ。回数で勝負」

私は、使い終わった紙皿やプラスチックの入った、大きなビニール袋の口をしぼる。イペントのある日は、洗い物をしなくていいように、使い捨ての食器を使う。ゴミはでるけれど、水をジャブジャブ使って洗ったり、グラスや皿を割ってしまうよりは、よっぽどエコだ。

「あー疲れた。歩くのも億劫だから、ちょっと中庭で休んでいこう」

弥生はジンジャーエール、私はビールを取り出し、中庭のベンチに腰掛ける。あたたかい風が顔にあたる。桜の花はとくに散ってしまった。タイムカプセルは無事見つかって、地面は平らにならされている。

「ねえ、お父さんがハード、わたしがソフト担当でさ。ちゃんとやったらさ。もつといいハイブリッドバーティができるよね」

「そうかもな」

「あー、でもコンテンツがないのかあ。今日はよく間がもったねえ」

「お客さんどうしの会話がコンテンツなんだよ」

お客さんに頼っていない、と自負していた。けれど今日、お客さんに助けられていた、と気づいた。足が遠のいたお客さんも、常連のお客さんも、今夜はみんなが楽しめるように、少しずつ気を使ってくれていた。互いに話をふったり、かぶらないように敢えて黙ったり。よい酒場というのは客が作る、と聞いたことがあるが、いつの間にか、この店もそうなっていた。

「お父さん。この間、ＩＴ関係の仕事をしたらって言ってよね。これって商売にならないかな？」

「これ？」

「オンライン・オフラインのハイブリッドイベント。機材とか設営とかするの」

「どうかなあ、それだけでやっていけるのかなあ」

「副業っていうのかな。なんか、ときどきやってます、みたいな」

「それなら成立するかもな」

店を引っ越したら、売上が思うように出ないかも知れないし、そもそも暇かも知れない。

「会社にして、弥生を正社員として雇ってあげるよ」

「そんな大げさな」

「新卒で就職しました、って履歴書に書けるぞ」

退去費用の使いみちとして悪くない。

「今日は疲れた。新しい会社のこととか、次の店のこととかは、明日また話そう」

弥生と私は立ち上がって、帰路についた。